

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認雑誌第六二七号
平成二十七年七月一日発行(第百十八卷第七号)

ホトトギス

七月号



俳句随想 〔三百九十七〕

汀子

ご投句の中の季題で春になって明るい俳句が心に添ってきて嬉しいが、次の季題の使い方が気になっていいる。「耕」を「春耕」、「霞」を「春霞」、「麗か」を「春うらら」、「彼岸」を「春彼岸」、「春の蝶」など、春を入れないでも春の季題なのである。短い言葉で表現する俳句は出来るだけ要らない表現は避けて、端的にきっぱりした一句に仕上げて頂きたい。今年も桜の季節が終った。日本列島を北上して行く何時もと違った感じで咲き進んで行ったようにも思う。毎年違った季節の推移があるから、俳句も様々な作品が生まれていくのである。日本語を大切に使う訓練は俳句を作っていくために大事なことかと思っている。若い世代の表現方法は、あるいはこれから変っていくのかも知れない。でも我々世代のもの、昔から大事にされて来た表現をこれからの世代の人々に間違いないく伝えて行かなければならない義務がある。

今年色々な俳誌の記念すべき節目に当たっているのか、私の許にもご案内を頂いた。どの俳誌にもお伺いしたいと思っているが、その日が重なってしまつて、既にお約束してしまつていいるために欠席しなければならぬところもある。又、他の予定が入つていて、お伺い出来ないのもあり、忸怩たる思いをしながら欠席のお返事を差し上げなければならぬ。明日は「阿蘇」の千号ということで、これはお伺いするのであるが、色々な齟齬もあり、今日は一日家で稿債を果たすために努力することにした。

旬日記 汀子

平成二十六年七月三日 ロイヤル俳優

夕立に濡るるほかなき家路かな
夕立の気配押し寄せ来たる空
暗みたるほどには降らず夕立去る
遠き日の記憶夾竹桃咲けば
四角にも丸にも使ふ夏座敷

七月五日 若屋ホトギス会

高原の朝雲海に閉ざさるる
返らざる今日といふ日よ露涼し
あふぐともあふがざるとも手に扇

七月六日 下朝句会

花合歡の遅速を問うて旅仕度
手を入れて住み古りゆくも夏館
六甲に生まるる雷のある如く

七月八日 大阪倶楽部

誠実な汗の笑顔でありしこと
涼しさに馴れてしまひし部屋を出る
雑草の如く刈られし月見草
計画のぐんぐん進む涼しさよ
飛機抜けて行くほかはなし雲の峰
昼寝より立ち直らんとしてしばし
邂逅に空白はなし涼しさよ

七月八日 網業倶楽部

声聞けば忽ち風の薫りけり
やうやくにつながる電話風薫る
湖見えてより薫風の渡りけり

七月十日 清文社

あなどれぬ夏の嵐の近づきて
高原の旅のはじまる月見草
森深き暗さ纏へる月見草
なほ立たぬ予定七月台風に

七月十一日 工業倶楽部

風怖怖れ取り止めとせし船遊

冷房にそなへ長袖用意して
雨上がりたるばかりなり草いきれ

七月十二日 東海ホトギス同人会

迷はざる汗のドライブ三時間
涼しさに居て涼じさを忘れぬし
かぶらなくとも持つてをり夏帽子
松蠟と気づきたるより旅心

七月十三日 東海ホトギス俳句大会

運転の余力残して汗一日
旅心一日はじまる朝曇

七月十三日 悼林直人様

妻恋うて梅雨期待たず逝かれしや
七月十五日 有恒俳句会

雲の峰崩るる午後の雨もよひ
ただ惚ふ心寄せ合ひ露涼し
汝が心惚べば辺り露涼し
なつかしき友を送らん汗涼し
探しもの又探しものしとど汗

七月十五日 無名会

六甲はなつかしきかな夏山に
夏山として目慣れたる日々ありぬ
涼しさに馴れてはならぬ旅路あり
友葬る日なりしせめて涼しさに
迷はずに知らぬ町行く涼しさよ
別れとはさりげなきもの露涼し
ふと眠しかり涼しさに包まれて

七月十六日 夏潮句会

月見草昼も咲き継ぐ森深き
雨れんとして立ち上る雲の峰
雲の峰崩れはじめし雨もよひ
月見草には夜の顔屋の顔
雲の峰いくつ越え来し空の旅

七月十七日 アネモネ句会

表情に加はる汗の語るもの
言葉より汗の語つてをりしこと
若さとは汗美しきものとして
みづうみの人声絶えぬ月見草

寄りそへば影もよりそふ月見草
七月十九日 石見ホトギス俳句大会前日句会

汗さつと引く山風を満身に
汗涼しりフト忘りて下りけり
肝心な時に忘れし夏帽子
今日遥かより来しことを語る汗
月見草今宵三瓶の宿りかな

七月二十日 石見ホトギス俳句大会

よく晴れば三瓶の朝の露涼し
合歡咲けば淋しはなし句碑の伽
歩くこと楽しむ三瓶露涼し

七月二十一日 地球ボランティア協会総会

世の中の心集めし涼しさよ
分りたるやうな分らぬ様な汗

七月二十三日 悼小林草吾様

召されたる友への祈り明易し
七月二十四日 きさらぎ句会

ハンモック大地に抱かれをりにけり
寝返りを打てば落ちさうハンモック
乗るときのこつを覚えてハンモック
結局は挿さずに一日持つ日傘
又一つ汗の予定の加はりぬ

七月二十四日 時雨句会

羅に見えてまづて涼しくなかりけり
雷のはじめまづてぬし雨の音
七月二十六日 野分会夏行

気力では負けず暑さに負けさうに
蠟時雨より楠の一歩二歩三歩
二千年経し楠の木の森涼し
花火待つ今宵熱海は坂の町
浴衣着て熱海に似合ふ人となる

七月二十七日 野分会夏行二日目

まだ誰も居ない会場涼しき灯
暑いとは口にもし合場涼しき灯
子等の声火花果ても果てざりし

七月三十日 悼吉田節子御主人様

恵まれし家族の絆夜の秋

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年七月一日 むさし野吟行会

蛇死して存在感を遺したる
夏蝶の好きな花とは揺れ易く
黒く来て青く去りゆく揚羽蝶
梅雨晴にもう迷ふことなき歩み

七月三日 蕉心会

水無月の空とは濡れてをらざりし
金魚てふ自由人間てふ不自由
君の香にふと止まりたる扇の手
船音が涼風誘ひ出してをり
人居らず夜釣の為の準備かも
水無月の歩幅に佳人らしさあり
時計草 蟻秒針になり切つて
句座 涼し 四十八の 瞳かな

七月四日 カトリック新聞選者吟

青葉木菟祈り捧げてゐるやうな
七月五日 あうたう句会

声涼し 十八歳の バスガイド
水嵩といふ 五月雨の 置土産
軽梟の子に 釣師湖面を 明け渡す

七月七日 「さわらび」八百号祝句

爽やかに 八百万への 一歩かな

七月十日 土筆会

近付いて 祇園囃と 判るまで
守り 抜き 夏炬 三百年の 艶
海の日や 嗚呼 五十六よ 光政よ

七月十日 「俳句さく・咲く」収録

さざなみを 雷雨の 叩きゆく 早さ
七月十三日 東海ホトトギス同人会、大会

竹島を 丸く 仕上げて 万緑裡
磴上る 一段づつ の 木下閣
橋の上 てふ 日盛の 風の中
その中 富嶽沈め 雲の峰
月涼し 三河の 夜の 伽として
七月十四日朝日 カルチャイ若草句会

ビール干す 佳人の 喉でありにけり
虹の 橋とは 渡れさう 潜れさう
乾杯は ぶだう 酒よりも ビールでせう
芦屋 川 夙 川 仁 川 川 開

七月十五日 登高会

頂きし 由緒正しき 扇かな
扇閉づより 君の 香でありにけり
半夏生 風を 手招きしてをりぬ
海開子 等そは そはと 畏り
七月十六日 北國文芸選者吟

旅人の 心 濡らして 月涼し

七月十七日 NHK学園神戸大会

山 襷を 深く 刻みて 六甲 晩夏
七月十八日 浜田吟行会

夏空に 突つ 込んで ゆく 浜田道
松 蟬や 森の 行間 綴りゆく
万緑の 島に 刺さりし 橋の 黙
黒揚羽 木々の 輪郭なぞりゆく
梅雨明か 雲の 百態 流れゆく

七月十九日 石見ホトトギス俳句大会

合 飲 咲いて 色の 整ひゆく 三瓶
七 分 の 空 中 散 歩 大 夏 野

山に 山重 ね 山並 山 晩夏
風音に 絞り 出されし 時鳥
アンタレスより 放たれし 雷かとも
飛機 涼し 星の 余白を 縫うて ゆく
咲くもの に 風の 存問 大夏野

七月二十日 若水句会

ほととぎす 創刊号に 紙魚 寄せず
満天の 星 仰ぎつつ 水菓 食ふ
紙魚 纏ふ ウルガタ 訳の 聖書かな
昨夜 星と 語らふ 宿に 氷菓 食ふ
チョコレートアイス クリームて ぶ至福
昨夜 星の 化身 日車 草の 昼

七月二十三日 目黒学園句会

夜の 秋 星と 対話を してをりぬ
夜の 秋 ワイングラスは 大き目
この 湖に 悲話あり ポート 滑りゆく
夜の 秋 億光年を 近づけて
のうぜんに 触れて 司祭の 車出づ

七月二十五・二十七日 野分会夏行

微の 宿 明治の 温みありにけり
文豪の 悲喜を 納めて 宿涼し
焚かずとも 明治を 語る 夏炬かな
病葉を 許さぬ 庭の 静寂かな
片陰を 拾ひ 明治の 香を 纏ひ
国宝に 視線 涼しく 集まれり
袴能 謡の 稽古 ロビー まで
遊船や 水平線 を 傾けて
一と 唸りして 遊船の 出港す
水の 星 焼き 尽すかに 大花火
三日 間 使ひ 切つたる 汗の 顔

雑詠

廣太郎 選

素つ気なくありしかまくら誰も居らず
 灯されてかまくらふつと命得し
 かまくらやつと童心に帰るとき
 穴だらけなりし若布の深みどり
 剃り終へて一撫でしたる初鏡
 外出好きなる女房に春の雪
 大空の色の節目も彼岸かな
 音よりも色の重さの落椿
 春昼の少し止つてゐる時間
 冬帝の糸くぼ二つの雲影
 風邪の子が皆勤賞のことを言ふ
 浦の淋しさは冬ざれのみならず
 落葉松の雪間と白樺の雪間
 題変りまた似たやうな里神楽
 鳥帰る浜の鴉は魚せせり
 雪晴や吾と連れ立つ影法師
 神杉の雪のオブジェとなり迫る
 天と地の間を通ふ雪女

東京 岩村恵子
 同 同
 同 同
 同 柴原保佳
 同 同
 同 橋本くに彦
 同 同
 徳島 岩由公次
 同 同
 東京 田丸千種
 同 同
 同 同
 米子 中村襄介
 同 同

薄氷や遠き記憶の端光る
 唄ふごと早春の陶並びをり
 大阪の夜を流して川臙
 空白の月日を埋め梅真白
 梅日和とは四分の三翳る
 雲といふ春の日溜ありにけり
 とくに性剥き出しにして野火走る
 草萌や地に空色の水溜り
 早春や青続きたる信号機
 海苔舟やジャンボ機の音とどろきて
 早春の日ざし睫毛に乗せてをり
 デザートの頃には上がり春時雨
 遠慮なき一人暮しの大噓
 散髪をして来し銀座春寒し
 皆が言ふ都心の夜は春寒し
 梅三分咲きとよ入園料採ると
 梅の五分咲きが見頃と言ひ合へる
 梅七分八分咲きなく咲き切ると
 初雪の触れ合ふ音のみなぎれる
 かんばせをひよつとこにして粥柱
 大神のかしこき黙や冬桜
 探梅の心が風を嗅いでをり
 青でなく藍でなくいぬふぐり色
 かへませうのせうに節つけ鸞替ふる

渋川 木暮陶句郎
 同 同
 同 同
 奈良 古賀しぐれ
 同 同
 神戸 山田佳乃
 同 同
 同 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 同 同
 熱海 嶋田一步
 同 同
 同 同
 福山 竹下陶子
 同 同
 同 同
 神戸 立村霜衣
 同 同

雑詠句評（六月号より）

一 歩・雅　・さい雪
霜　衣・くに彦・純　也
仁　義・佳　乃・公　次
しげ人・廣太郎

春色のものの音にもありしこと　神戸 後藤立夫

春色とはあまり聞かない言葉であるが春の景色のことを言うのである。即ち此の句は冬も終りになり春になって来ると、なにか家の中にも春になったなあと思うような物音を聞くようになり、その聞えて来た音によつて春のどうか春らしい景色を思い浮べている自分がいるのである。即ち音を聞いただけでなく、聞くことによつて春の一つの景色を思い描いたと言うのである。即ち俳句でいう客観写生を耳で受けとめて一つの景を描いたのである。俳句での視点を心で捕えた句であるとも言えよう。

（一歩）

季節の感じ方は人それぞれであるが、多くはその視覚的な変化

で感じる人は多いのではないだろうか。この句では、聴覚的な感じ方で捉えておられる。確かに「音色」という言葉もあるように心地良い自然の音に作者は春を感じたのである。俳人の敏感な心が鋭く感じられる句である。（廣太郎）

東京の雪に雪国人闊歩　長岡 安原　葉

雪に慣れない者にとつては、まこと雪道は怖いのだが、雪国の人にとつては、日頃の雪の深さに較べると、東京の雪なんかは、何てことはないのでしょう。今にも転びそうな人達を尻目に、むしろ雪道を楽しんでいるようだ。颯爽とゆく姿が、雪の中へ消えてゆく。

雪を詠む場合、土地土地で人々の思いは様々でしょうが、東京での雪の日を、雪国の人が伝える言葉は、まさしく闊歩だと感じさせられた。（雅）

東京に雪が降つて数センチ積もると、その日は交通機関が麻痺したり、外を歩いていると、雪に足をとられて転んで骨折をして救急車で病院に運ばれたりと大騒ぎしているが、雪国の人にとつては雪道を歩くコツは会得しておられるのだろう。この「闊歩」という言葉に自信が感じられる。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

花子選

いかならむ白寿の春に見る夢は 神戸 後藤比奈夫
 宝船敷くを忘れて見たる夢 同
 この雛の間に偲ばるる月日あり 長岡 安原 葉
 旅人のなき春寒の京の路地 同
 大嵐忌日攫つてゆく秋思 東京 稲畑廣太郎
 身に入むや一会中止となる嵐 同
 端といふもののなかりし踏絵かな 龍ヶ崎 今橋眞理子
 締切り日はたとありけり二月尽 同
 散りつづく梅に梨園の計のまとも 東京 今井千鶴子
 ぼつぺんを吹けば遙かや踏絵の世 同
 寒行のごとくに学ぶ夜の句会 熊本 岩岡中正
 寒きびし一字もおろそかにできぬ 同
 ほつれたりもつれたりしてまんざく黄 神戸 後藤立夫
 むらさきの一途と思ふ寒あやめ 同
 教会の十字架光る春立つ日 吹田 大橋 暁
 大阪城に先陣を切る梅一樹 同
 貸し失せし虚子の一書や書を曝す 福山 竹下陶子
 着飾りし神の子ばかり七五三 同

焚かれざるままに夏炉となりにけり 群馬 中杉隆世
 まつすぐに降つてゐるなり夏の雨 同
 薄氷や光も闇も透けてをり 神戸 長山あや
 病む夫の書を読む窓辺椿咲く 同
 春寒の雨乾坤の潤へり 東京 河野美奇
 梅日和とは咲き初めの頃のこと 同
 逸る瀬の音にさゆれて猫柳 神戸 千原叡子
 象山の宮のここだの落柳 同
 青空へ広がる未来燕の子 東京 今井肖子
 待つといふ楽しさ雲の峰仰ぐ 同
 論文に虚子を選びて卒業す 神戸 三村純也
 天気また雨の予報の名草の芽 同
 なほ続く絵踏の話島の夜 東京 山田閨子
 悼む人あり白梅に心寄せ 同
 きらめきて空より降りてくる余寒 同
 まだかすか春の水音光りきし 同
 突然のごとく咲くとよ寒桜 熱海 嶋田一步
 梅園に行く人に咲き寒桜 同

愛車

稲畑汀子

第六回永田青嵐顕彰俳句大会が、二月二十二日に開催されることになった。毎年、回を重ねて行々のであるが、今年は虚子記念文学館で開催する虚子生誕祭を一日繰り上げて二十一日の土曜日にする事で予定が納まった。その夜に淡路島の洲本のホテルニュー淡路に伺うことにした。多分夜の七時頃には到着すると連絡を入れておいた。

淡路島に明石大橋が架かって二十年近くなる。開通間近に起こった阪神淡路大震災の時は橋桁が一米程ずれたとも聞いた。それは大したダメージにもならなかったという。船でしか行けなかった淡路島が陸続きになり、簡単に行き来が出来るようになった。同じ兵庫県ということもあって、大会の打ち合わせも簡単になった。行政が段取りをしてくれるのでしつかり事が運んで行く。

今年の永田青嵐顕彰俳句大会は、安原葉さんが講演をして下さる事になった。虚子生誕祭の後、私の車で葉さんと千源叡子さんをお乗せして行くが、明石大橋と淡路島の高速道路は最高速度一〇〇キロ制限で車も少なく快適な道路である。

「運転止めたら？」

廣太郎は、私に会うと言う。

「まだ、大丈夫よ。それに、私の行動範囲は車がないと仕事は続けられないでしょ。駅まで送ってあげますよ」

私の劍幕には逆らえないのか黙って助手席に乗ってくれる。

私の運転歴は免許を取って五十三年。ようやく五十年ぶりにゴールドの免許証を頂いて、いよいよ慎重な運転を心掛けていく。

車は免許を取ってすぐに、神戸に住む外国人から、英国のフォードのプリフェクトという中古車を一万円で譲って貰い、この車を使いこなせられなかったら運転は止めるようにと夫から言われた。既に三十万マイル走っているぼろ車である。簡単な構造なので、途中でエンジンが停まると、前のボンネットを開けて、エアクリーナーを外し、キャブレターのジェットを、積んでおいた自転車の空気入れでしゅつと埃を取るだけでエンジンがかかる。六甲山から下りて来るときは、セカンドギアがすとんと抜けるので手で押さえながら山道を下りて来る。隣に乗っている人が居れば押さえ貰う。

「恐いなー……」

と言われながら、夏は毎日のように六甲の山荘と芦屋の家を行き来していた。

「パンクも自分で取り替える」

夫は厳しかった。年末年始は夫の車の整備を手伝わされた。いよいよ私の愛車がボンコツになった時、日産自動車が新車の名前を募集したので私は早速応募し、「スカーレット」と書いた。マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』が好きだった。

募集した応募の新車の名前は「サニー」だった。私は大枚を投じて新車を購入した。もうボンネットを開けて空気に入れてゴミを払わなくてもよくなった。ギアも抜けない。快適な運転が出来るようになった。スカイライン、グロリア、シーマ、フーガ、何台も乗り継いだ。だんだん車の色に執着し始めた。紺と白のツートンカラー。紺と言ってもグレイに近いのが今の私の愛車となった。私は紺が欲しかった。

「本当の濃紺が日産から出ました。如何ですか」

という案内が届いた。もう定年になったが、四十年近く世話をしてくれた塚本さんに相談した。

「これが最後になるかも知れないでしょ。この前、穴に嵌まって怪我をした私に、シーマの手付金を返して下さったのを大切に取って置いてあるのよ」

塚本さんは少し呆れたように手を貸してくれた。

「いよいよこれが最後だわ」

淡路島行きは、私が大切に乗って来た現在の愛車フーガの最後の遠出になるだろう。

